
原著論文

自閉症啓発活動事業におけるイベント参加者の「障害観」に関する一考察

川上 愛理, 千葉真理子

A study about “conception of disability” of participants in enlightenment activity of autism.

Airi Kawakami and Mariko Chiba

This paper describes the “conception of disability” participants in exchange meeting with autism. We asked participants by using the questionnaire about experience of exchanges with disabilities and the image of people with disabilities. That main results went as the following.

1) Positive image to people with disabilities, the person who have wide experience with disabilities was better than the person inexperienced.

2) The image to people with disabilities changed negative image to positive image by exchange with disabilities.

Understanding about disability and planned exchange are effective at lessening a negative image to people with disabilities.

1. 背景・目的

1981年の国際障害者年は、「完全参加と平等」をテーマとし、これを契機に日本においてもノーマライゼーションの理念が普及した。1995年には、リハビリテーションとノーマライゼーションの理念を踏まえ、7つの視点から施策の推進を図ることを目的とした「障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～」が発表された。その6つ目の視点において、障害者への心のバリアを取り除くために、ボランティアや行事を通して、子供の頃から障害者との交流の機会を拡げるとともに、啓発・広報を積極的に展開することにより、障害および障害者についての国民の理解を深めることが掲げられた¹⁾。

2002年に策定された障害者基本計画においては、ノーマライゼーションやリハビリテーションの理念を継承した「共生社会」の実現が重要な課題として掲げられた。「共生社会」とは「障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる²⁾社会であり、「国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う³⁾社会である。21世紀に我が国が目指すべき社会のあり方として提示され、その実現に向け今日まで多くの法令整備がなされている。

近年は、障害についてメディア等で取り上げられることも増え、障害に対する認知は広まっている。しかし、未だに障害のある人に対する周囲の理解は十分なものと

は言い難い。障害のある人を取り巻く社会環境には物理的な障壁、制度的な障壁、文化・情緒面の障壁、意識上の障壁が存在する⁴⁾。そしてこれらの障壁を形作る要因の一つとして、障害のある人に対する偏見や誤解、つまり否定的な障害観の存在が挙げられる。内閣府の「障害者に関する世論調査」⁵⁾において「障害のある人に対し障害を理由とする差別や偏見があると思うか」という質問に対し、「少しはあると思う」人を含めて89.2%の人が「差別や偏見があると思う」と回答していた。これは障害のある人に対する偏見や誤解が多く存在していることを示している。これから目指されるべき社会である、障害の有無に関わらず互いに支えあう全員参加型の社会のためには、障害のある人に対する偏見や誤解、間違った障害観を正していくことは重要である。

自閉性障害や知的障害者に対するイメージについては様々な研究報告がなされており、田実(2007)は、自閉症に関する知識・理解を深めることで、偏見が解消され積極的に関わろうという意識の変化がみられたと報告している⁶⁾。河内らの研究においても、自閉症のイメージは個人の知識に依存する傾向にあり、発達障害に関する情報にふれる機会が多ければ、自閉症のイメージはポジティブな方向へ進むことが示唆されている⁷⁾。

木船(1986)は、精神薄弱児との交流を経験した児童は無経験の児童よりも態度がポジティブであり、日常交流や行事交流は教科交流よりも態度変容に及ぼす効果が強かったことを報告している⁸⁾。池内は、保育を専攻す

る短期大学生47名を対象に、障害のある人との交流による障害者観の変化の研究を行い、障害について学び、障害のある人や子どもと関わることで、大人になってからでも障害のある人に対するイメージが否定的なものから肯定的なものへと変化することを報告している⁹⁾。障害や障害のある人との接近回数が多いほど肯定的なイメージへと変化し、特に直接的な対人接触は障害のある人への偏見解消の効果が高いという結果が多く見出されているが、自閉症障害に関する研究において、啓発活動事業としてデータを採取した例はほとんどない。

以上のことから、本研究では、大学生に限らず、高校生や社会人を含むより幅広い年齢層を対象とし、障害をもつ人との関わりの有無や啓発活動事業のイベントにおける自閉症者との交流がその人の障害観にどのような影響を与えるのかを明らかにした。そしてそのことにより、障害の有無に関わらず互いに尊敬しあいながら生活する社会のあり方を検討した。

II. 方法

平成27年11月8日に実施された自閉症啓発活動事業におけるイベント「友・遊・デー」にボランティアとして参加した15歳から80歳までの31名を対象にアンケート調査を実施した。

調査項目は、障害のある人との交流経験の有無においては、「統合教育経験の有無」「交流教育経験の有無」「大学入学以前の学校以外での障害のある人との交流の有無」について回答をまとめた。加えて、障害のある人と交流することによる障害者観の変化において、「大学入学後の障害のある人へのイメージの変化」「イベント参加時の自閉症の人との交流の有無」「イベント参加後の障害のある人へのイメージの変化」「イベントに参加して良かったかどうか」についてそれぞれ解答をまとめた。また、「障害や障害者という言葉をきいて抱くイメージ」「大学入学前後の障害のある人へのイメージ」「イベント参加前後の障害のある人へのイメージ」「イベントに参加してよかった理由」について自由記述での回答を求めた。これらの結果を集計し、考察を加えるとともに、本調査の結果と、池内昌美の先行研究「交流授業を通しての障害者観の変化」¹⁰⁾において、障害者施設のイベントに参加した保育を専攻する短期大学生47名を対象として実施されたアンケート結果とを比較し、考察を加えた。

なお、本論文でいう「統合教育」とは、障害児を直接健常児集団に統合して教育を行うことである¹¹⁾。また、「交流教育」とは、両集団の活動の場を統合し、交流をもつことを目指すものであり¹²⁾、特別支援学校や特別支

援学級の生徒が通常学級の生徒と協同学習を行うことや、学校行事などにおいて交流をすることを含む。

分析は、 χ^2 検定を行った。

III. 結果

1. 障害のある人との交流の有無

1) 統合教育の経験の有無

小学生時に統合教育の経験がある者は9名(36.0%)、経験がない者は16名(64.0%)であった。中学生時に統合教育の経験がある者は7名(28.0%)、経験がない者は18名(72.0%)であった。統合教育経験のない学生が、統合教育経験のある学生より有意に多かった($p < 0.05$)。高校生時に統合教育の経験がある者は0名(0%)、経験がない者は25名(100%)であった(図1)。

2) 交流教育経験の有無

小学生時に交流教育の経験がある者は13名(54.2%)、経験がない者は11名(45.8%)、中学生時に交流教育の経験がある者は8名(33.3%)、経験がない者は16名(66.7%)、高校生時に交流教育の経験がある者は1名(4.2%)、経験がない者は23名(95.8%)であった。交流経験のない者が、交流経験のある者より有意に多かった($p < 0.05$) (図2)。

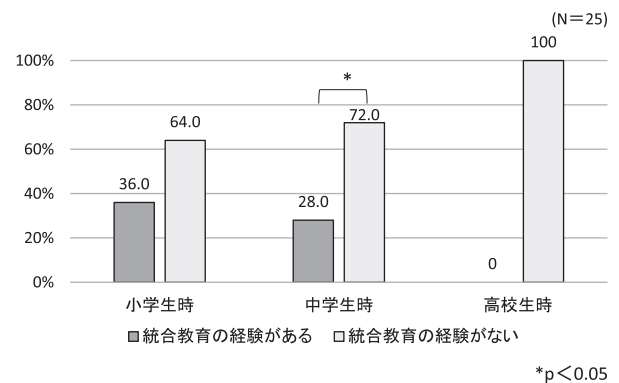


図1 統合教育の経験の有無

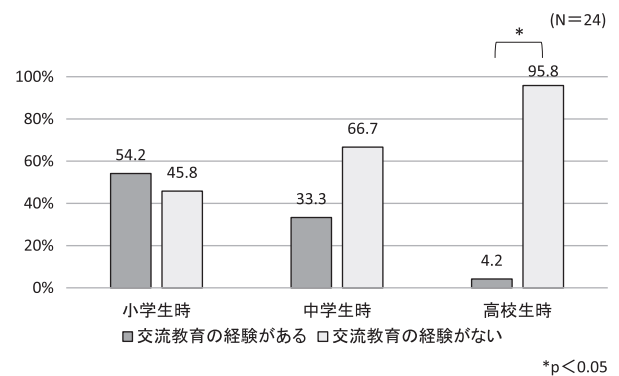


図2 交流経験の有無

3) 大学入学以前での障害のある人との交流の有無

大学入学以前の障害のある人との交流経験の有無は「交流がある」が 8 名（34.8%）「交流がない」が 15 名（65.2%）であった（図 3）。

2. 障害のある人と交流することによる障害者観の変化・

1) 大学入学後の障害のある人へのイメージの変化

大学入学後の障害のある人へのイメージの変化は「変化した」が 10 名（52.6%）「どちらともいえない」が 6 名（31.6%）「変化しなかった」が 3 名（15.8%）であった（図 4）。

2) イベント参加時の自閉症のある人との交流の有無

イベント参加時の自閉症のある人との交流の有無は「交流できた」が 22 名（88.0%）「交流できなかった」が 3 名（12.0%）であった（図 5）。

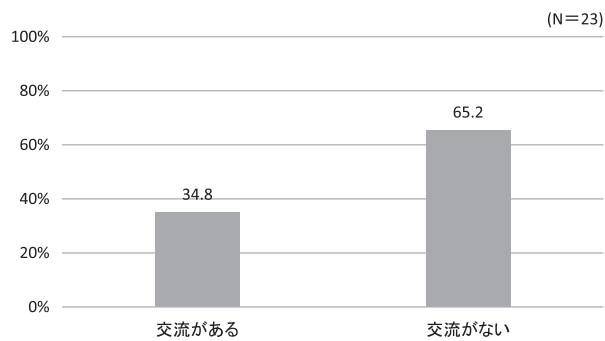


図 3 大学入学以前の障害のある人との交流の有無

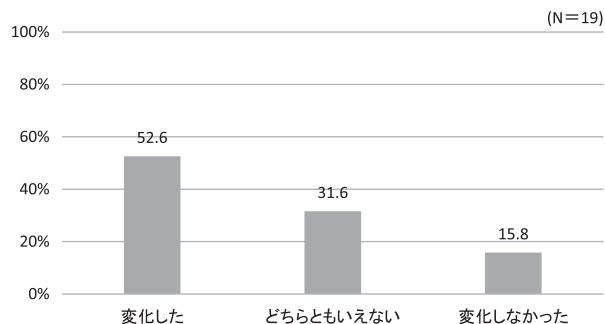


図 4 大学入学後の障害のある人へのイメージの変化

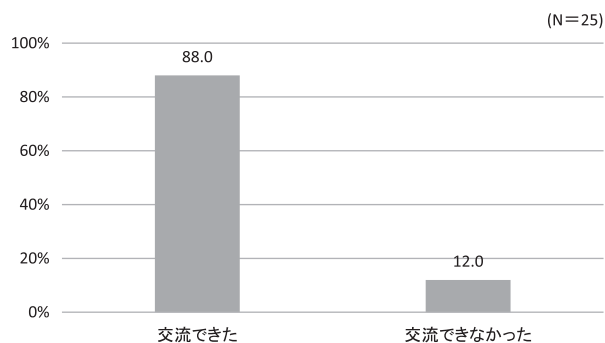


図 5 イベント参加時の自閉症のある人との交流の有無

3) イベント参加後の障害のある人へのイメージの変化

イベントに参加した後の、障害のある人へのイメージが変化はイメージが「変化した」は 10 名（40.0%）「どちらともいえない」が 8 名（32.0%）「変化しなかった」が 7 名（28.0%）であった（図 6）。

4) イベントに参加して良かったか

イベントに参加して良かったかどうかは「良かった」が 26 名（100%）「どちらともいえない」「悪かった」は皆無であった（図 7）。

3. 自由記述

自由記述は、被調査者の気持ちが伝わるよう原文のまま記載した。

1) 「障害」や「障害者」と聞いて抱くイメージ

「障害」や「障害者」と聞いて抱くイメージについて、「肯定的」と捉えられるもの、「否定的」と捉えられるもの、肯定的、否定的のどちらともつかないものを「その他」として分類した（表 1）。

2) 大学入学前後の障害のある人へのイメージの変化

大学入学前後の障害のある人へのイメージについては、以下の 9 名について変化がみられた。

ケース 1

（入学前）よく分からない。あまり意識したことがなかった。

（入学後）手助けしたい。もっと理解したい。

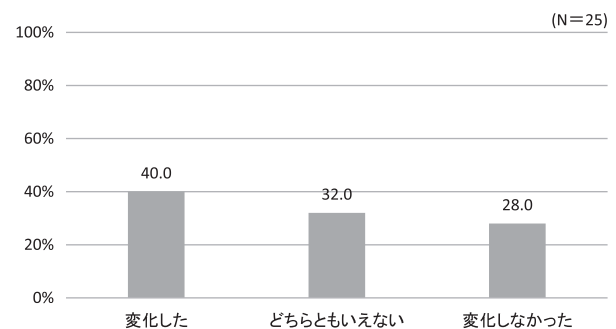


図 6 イベント参加後の障害のある人へのイメージの変化

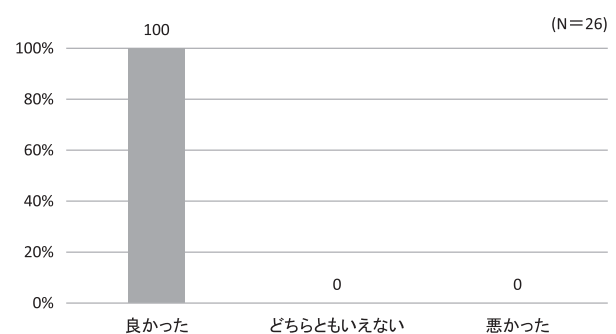


図 7 イベントに参加して良かったかどうか

表1 「障害」や「障害者」と聞いて抱くイメージ

肯定的	否定的
<ul style="list-style-type: none"> ・ユニークな人。 ・「マイノリティ」という言葉が使われますが、関係者も入れたらそんなことは無いと思います。 ・それぞれなりたくてなった障害はないと思うので、ある意味それぞれがもつ「個性」といえるのではないかと思う。 ・差別や区別するのではなく、個性を尊重して認め合うことが大切だと思う。 ・多少できないことがあっても他の面では素晴らしい能力を持っています。 ・もっと理解していと思うし、理解のない人には理解してもらいたい。 ・困っていることをサポートしてあげれば、何ら一般の方と生活できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮や支援を必要としている人。 ・社会的弱者、社会的少数者。 ・差別されている。 ・ハンディキャップ。 ・コミュニケーションが苦手。 ・もじもじしている。 ・電車とかで近くにいたら少しイヤだなと思ってしまう。 ・こわい。 ・良いイメージはわからない。 ・生活しにくそう。 ・距離を縮めるのが難しい。 ・気の毒に思う。 ・「大変だな～」「かわいそうやな～」とかのイメージをもっていた。 ・直接接するのは避ける感じである。
その他	
<ul style="list-style-type: none"> ・以前と比べると「悲しい」から「多様な」ものへと変わってきているが、心の底から変わっているかは多少疑問あり。 ・独特の世界観をもっている。 ・学校などで皆とは違う活動をしている。 	

ケース2

(入学前) 少し変わっていて怖いイメージ。

(入学後) 皆同じ人間だから、怖いと思うのはダメだと感じるようになった。

ケース3

(入学前) 何をされるか分からないから怖い。あまり関わりたくない。

(入学後) 素直。特技を持っている。もっと障害のことを勉強したい。

ケース4

(入学前) 障害をもたない人に比べ不快な生活を送っている。

(入学後) 障害をもつからといって障害をもたない人に比べ生活が劣るわけではなく、彼ら自身の生活スタイルがあり、一緒に楽しんだり、共有することができる。

ケース5

(入学前) そもそも興味が無い。

(入学後) 私たちと同じ。一緒に居て楽。

ケース6

(入学前) 触れ合いたいけど、触れ合い方が分からない。

(入学後) 人それぞれ性格が違うだけで、障害をもっていない人と何ら変わらない。とてもユニークなおもしろい人たち。

ケース7

(入学前) ぼんやりとしたイメージでしかなく、身近に感じられなかった。町や電車で出会うとどうしようか戸惑っていた。

(入学後) 電車などで出会っても戸惑わなくなり、何か助けを必要としないか考えるようになった。

ケース8

(入学前) 大変な人たち。

(入学後) 自分たちと同じように個性を持っている人たち。

ケース9

(入学前) 接する際に障害者を傷つけることがないように気をつけないといけないという自分の気持ちから距離を縮めるのが難しい。

(入学後) 一人一人のキャラクターに魅力を感じるようになった。

3) イベント参加前後での障害のある人へのイメージの変化

イベントの参加前後での障害のある人へのイメージについては、以下の8名について変化がみられた。

ケース1

(参加前) コミュニケーションが苦手

(参加後) イベントが進むにつれて少しずつ話してく

れる姿を見てコミュニケーションが苦手なんだと決め付けているのは良くないと思った。

ケース 2

(参加前) 話しかけてもあまり会話できなかったり、仲良くなれないかなと思っていた。

(参加後) 話しかけたら答えてくれるし、相手からも話しかけてくれて仲良くなれた。

ケース 3

(参加前) 話をすることが難しい。近づきにくい。

(参加後) 話し方を工夫すれば会話ができる。

ケース 4

(参加前) 何となく暗くて、人としゃべることが苦手、極力避けているようなイメージ。

(参加後) とても明るい方が多い。人としゃべることが好きな人もいるのだなと思った。ほんの少しだけ不器用なだけなんだと思った。

ケース 5

(参加前) 交流する際にかなり気を配らないといけない。不安になる対象。

(参加後) 相手を知ろうとすれば、一緒に共有や活動もできる。楽しい人。

ケース 6

(参加前) どのように接したらいいかわからなかった。

(参加後) 特に自閉症の方を身近に感じる事ができた。

ケース 7

(参加前) ちゃんとコミュニケーションがとれるか不安。

(参加後) コミュニケーションはしっかりとれるし、とても素直な人たち。

ケース 8

(参加前) ある一定の方々やと思っていた。

(参加後) 人それぞれにより違っていることを知った。

4) イベントに参加して良かった理由

イベントに参加して良かった理由については、以下の意見が挙げられた。

- ・楽しい時間を過ごせた。
- ・様々な人と交流できた。
- ・思っていた以上に皆さんしっかりしていて、フレンドリーだった。
- ・自分の障害のある方に対するイメージが良い方に変ったから。
- ・今まで自閉症の人と関わる機会がなかったため、どのように関わればよいかなど、考えながら触れ合う機会ができてよかったから。
- ・当事者さんたちと一緒に楽しむことで、理論で理解し

ている以上の学びがあったから。

- ・良い経験になったから。
- ・学生のときから知っている参加者の元気な姿がみれたので。
- ・他施設のメンバーさんたちの様子を見られたことがとても良かったです。

IV. 考察

統合教育、交流教育経験の有無については、統合教育の経験者は小・中学生時は半数以下、高校生時は皆無であった。交流教育の経験者は、小学生時は約半数、中学生時には半数以下となり、高校生時には極めて低い数であった。このことから、年齢の低い小学生時には、障害のある子どもも地域の学校へ通っており、年齢が高くなるにつれ、知的能力の差や学力の差が大きくなり、障害のある子どもとそうでない子どもが同じ時間や同じ場所で学習する機会が少なくなっていったと考えられる。先行研究のアンケート結果と比較した結果、「小学生時の交流経験の有無」において違いがみられた。小学生時に交流教育の経験があると回答した割合は、本調査の方が 13.9 ポイント低く、短期大学生と比較して、「友・遊・デー」参加者の方が小学生時に交流教育経験が少なかったといえる。

大学入学以前の学校以外での障害のある人との交流の有無については、交流経験がなかった者が半数以上であった (15 名, 65.2%)。このことから、地域における障害のある人との交流機会は少なかったと考えられる。

大学入学後、障害のある人に対するイメージが変化した者は約半数であった (10 名, 52.6%)。また、変化したと回答した者の多くが肯定的なイメージへと変化していた。

入学以前のイメージは「関わることがない」「意識したことがない」「興味がない」等の無関心さを表す言葉が多くみられた。その他、「怖い」「よく分からない」といった否定的なイメージが挙げられた。これは、障害について学ぶ機会や、地域や学校などにおいて、障害のある人や子どもと交流する機会が少なかったため、障害に対して関心を持つきっかけがなかったと考えられる。また、障害に対する知識が乏しいことから否定的なイメージを抱いていたのではないかと考えられる。

入学以前の否定的なイメージから、入学後のイメージでは「もっと理解したい」「手助けしたい」「私たちと同じ」「おもしろい人たち」といったように肯定的なものへと変化していた。イメージが変化した理由は「障害児キャンプに参加したから」「障害について学んだから」「へ

ルパーやボランティアを経験したから」などの意見が挙げられた。

伊藤・田川(1967)は、障害児についての無知が偏見を強めること¹³⁾、また、遠藤・山口(1969)は、知的障害児との接触経験の多い子どものほうが知的障害児に対して肯定的あるいは好意的であること¹⁴⁾を指摘している。

このことから、大学入学後に障害のある人々と実際に触れ合う経験を重ねることや、障害に関する知識を得ることにより、障害や障害のある人をより身近な存在として捉えられるようになり、否定的なイメージから肯定的なイメージへと変化したと考えられる。

「統合教育経験の有無」、「大学入学以前の障害のある人や子どもとの交流の有無」、「大学入学前後のイメージの変化の有無」およびそのイメージの自由記述においては、先行研究の結果と大きな差はみられなかった。このことから、義務教育時や地域における障害のある人や子どもとの交流機会の少なさがうかがえる。また、大学在学時の障害のある人との交流経験や障害に関する学びは、障害や障害のある人に対するイメージを否定的なものから肯定的なものへと変容させる契機となり得るといえる。

本調査において、先行研究と大きな差がみられたのは「イベント参加時の障害のある人との交流の有無」であった。「友・遊・デー」参加者のうち、自閉症者と「交流できた」と回答した者は約9割(88.0%)であった。一方、先行研究においては、交流できた学生は約半数(46.7%)であった。この理由について、池内は、「年に一回のイベントでの交流のため、そのときに出会った障害のある人や子どものことを理解してコミュニケーションをとることが難しかった」からであると推察している¹⁵⁾。しかし、「友・遊・デー」においても、年に一度のイベントであるというのは同様である。そうであるにもかかわらず、約9割の者が交流できた理由として、事前学習の実施とプログラム実施体制の2点が挙げられる。一点目の事前学習については、イベント数日前に、障害に関する知識を座学で学び、過去のイベント実施の様子を映像で確認した。このことにより、自閉症とはどのようなものなのかを理解し、イベントがどのように進行されるのか、自分がどのように行動すればよいのかといったことを参加者自身が具体的に想像することができた。2点目のプログラム実施体制については、イベント当日に、チーム分けを行い、チームごとにリーダーや副リーダーを決定した。更に参加学生と、自閉症者とのペア組みがなされ、ペアとなる人のプロフィールを閲覧し、その人に関する情報を得ていた。プログラム内容は細やかにスケジュー

リングされ、リハーサルも行われた。これらの結果、参加者はイベント参加への準備をしやすく、自閉症の人との深い交流が可能になったのではないかと考えられる。

大谷(2001)は、事前指導において、交流を予定している障害児の情報を提供することは、健常児の障害児に対する好意度を高め、不安をなくし、障害児を受け入れようとする心構えを作るために有効であることを報告している¹⁶⁾。一方で、小学生の障害児との交流活動において、障害児に対する好意的イメージが交流活動後に低くなることも明らかにしている。この原因として大谷は、障害児(者)に対する理解の程度が浅く、交流活動時に深く接触する機会がなかったためであると推察している。

このことから、障害のある人と関わるにあたり、「友・遊・デー」のように、障害に関する知識や、障害のある人個人の特徴や性格等の情報を事前に知することは、「障害」や「障害者」に対する理解を促し、肯定的イメージを形成する点において重要であると考えられる。

イベントに参加して障害をもつ人へのイメージが変化した者は半数以下であり(10名、40%)、先行研究における結果と類似していた¹⁷⁾。池内は、イメージが変化した学生が半数以下であった理由を、イベント参加時に障害をもつ人との交流が少なかったことであると考察している¹⁸⁾。しかし、「友・遊・デー」参加者の約9割が自閉症者と交流できたと回答している。つまり、イベント参加時に自閉症者との交流ができていたにもかかわらず、障害をもつ人へのイメージが変化した者が少なかったといえる。この理由として挙げられるのは、イベント参加者の層の違いであると考えられる。「友・遊・デー」は、学生のみでなく、社会人の参加者が多くみられた。その中には、仕事で障害のある人や子どもと関わっている者や、障害者・高齢者の支援を行うボランティアグループに所属している者もみられた。つまり、普段の生活上で障害のある人との触れ合いが多く、障害に関する知識を十分に有している者が参加者の中に多かったと考えられる。このため、イベント参加後に障害のある人や子どもに対するイメージが変化した者が少なかったのではないかと推察される。実際、「イメージが変化した」と回答した10名のうち、9名が、障害のある人との交流や障害に関する知識が乏しいと考えられる高校生や大学生であった。

また、「障害や障害者と聞いて抱くイメージ」においても、日常的に障害のある者との関わりがあり、障害に対する知識が豊富であると考えられる社会人参加者の回答では、「それぞれがもつ個性といえる」、「多少できないことがあっても他の面ではすばらしい能力をもってい

る」等といった、学生の回答上ではみられなかった肯定的イメージが多数挙げられていた。

イベントに参加して良かったと回答した者の割合は 100%であり、悪かったと回答した者は無かった。その理由として、「良い経験になった」、「理論で理解している以上の学びがあったから」「イメージが良い方に変わったから」等の意見がみられた。このことから、イベント参加によって障害のある人や子どもへの理解がすすんだと考えられる。一方、先行研究においては、イベント参加時の交流機会は少なかったものの、参加してよかったと回答した学生が多数であった。これらのことから、イベントに「参加する」こと自体に意義があるものであると考えられる。

統合教育・交流教育が、小学生時から高校生時になるにつれて少なくなっていくように、障害のある人や子どもと関わる機会が成長とともに少なくなっている。また、地域等で日常生活上において障害のある人や子どもと関わる機会は決して多くない。本研究では、日常生活において障害のある人や子どもとの関わりのある者は、障害のある人や子どもに対して肯定的なイメージを抱いていることが分かった。また、障害のある人と交流するイベントへの参加により、障害のある人や子どもに対する否定的なイメージが肯定的なイメージへ変化することが明らかになった。そして、普段障害のある人や子どもと関わる経験が少ない者にとって、「友・遊・デー」や先行研究内のイベントのように障害のある人と関わるイベントに参加することは「貴重な経験」と捉えられ、障害や障害のある人に対する理解を促し、関心を抱ききかけにもなり得る。このことから、障害のある人と「実際に触れ合う」ことは障害に対する偏見や誤解、固定概念を解消するために非常に重要であると考えられる。

しかし、障害のある人との交流は必ずしもポジティブな変容を促すわけではない。山内は、地域における障害者との偶然の接触経験がネガティブな体験となることが少なくないことを述べ、障害者に対する偏見的態度を変容させる接触の条件の一つとして「偶然ではなく、計画的に行われる相互作用の接触」を挙げている¹⁹⁾。

また、河内 (1990) は、障害者との接触において、接触の内容をあらかじめ計画し組織化した計画的接触は、非計画的接触の場合と比較し、好意的な態度変容がおきやすいことを明らかにするとともに準備段階としての障害児 (者) 理解の教育を行うことの重要性を述べている²⁰⁾。

このことから、障害のある者や子どもへの理解がないままの無計画な接触では、かえってネガティブな印象を与えてしまう可能性がある。そのため、障害のある人や

子どもに対する偏見解消には、「友・遊・デー」のイベントのように目的やプログラム内容が明確であり、事前学習およびプログラムの実施体制が整っている計画的な接触・交流体験が望まれる。

そして、このような計画的な接触・交流体験に至る入り口として、まずは一人一人が相手のことを知り、障害や障害のある人に関心を持つことが重要であると考ええる。正しい知識を学んだうえで交流体験を行うことで、より効果的にポジティブな態度変容を促すことができる。例えば、学校等の教育機関において障害理解についての教育プログラムを展開することは非常に重要であり、積極的な実施が望まれる。相手のことを理解するのは難しく、障害理解の個人への細やかな対応は決して容易ではない。しかし、障害について関心を寄せるきっかけとなるような取り組みを増やしていくことが、障害理解への第一歩となるのではないかと考える。

いくら国や政府が共生社会の実現を提唱し、政策を整備しても、国民一人一人の障害に対する意識が変化しなければ共生社会の実現は難しい。まず相手のことを知ることからはじめ、関心を抱き、理解し、交流を行う。このような経験を重ねていく中で障害を他人事とするのではなく、自らに関係することであると捉え「障害のある人と共に生きる」という意識を高めていく。このような意識を高めていくことが障害の有無に関わらず、互いに尊敬し支え合う共生社会のために必要なことではないかと考える。

謝辞

本論文の作成にあたり、アンケート調査にご協力いただきましたイベント参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 内閣府 障害者プランの概要 ～ノーマライゼーション7か年戦略～ <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/plan.html>
- 2) 文部科学省 共生社会の実現に向けて http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm
- 3) 内閣府 障害者基本計画 <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonkeikaku.html>
- 4) 総理府編「平成7年版障害者白書 バリアフリー社会をめざして」大蔵省印刷局、1995、p.5
- 5) 内閣府 世論調査 2014 <http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-shougai/index.html>
- 6) 田実潔『『購読演習』による自閉症イメージ形成の

- 可能性について—教授法（FD）の観点から—」北星学園大学社会福祉学部北星論集，2007，44，17-24
- 7) 河内哲也，齊藤恵一，河内なづさ，伊藤淳一「大学生における自閉症のイメージに関する研究」北海道言語文化研究，2009，7，63-70
- 8) 木船憲幸「精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係」特殊教育学研究，1986，24(1)，11-19
- 9) 池内昌美「交流授業を通しての障害者観の変化」西山学苑紀要，2013，8，25-39
- 10) 前掲書 9)
- 11) 藤沢洋子「障害児教育における統合教育の現状」大阪教育大学障害児教育研究紀要，1986，9，23-34
- 12) 前掲書 11)
- 13) 伊藤隆二・田川元康「心身障害児に対する社会人の態度（偏見）に関する研究」特殊教育学研究，1967，5(1)，1-12
- 14) 遠藤真・山口洋史「精神薄弱児に対する態度の研究」特殊教育学研究，1969，(2)，19-27
- 15) 前掲書 9)，p. 36
- 16) 大谷博俊「交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成—態度と事前指導における情報提供，交流経験，評価対象となる知的障害児の特定と関連性の検討—」特殊教育学研究，2001，39(1)，17-24
- 17) 前掲書 9)，p. 31
- 18) 前掲書 9)，p. 36
- 19) 山内隆久「偏見解消の心理 対人接触による障害者の理解」，ナカニシヤ出版，京都府，2000
- 20) 河内清彦「学生および教師の視覚障害者観」，文化書房博文社，東京都，1990